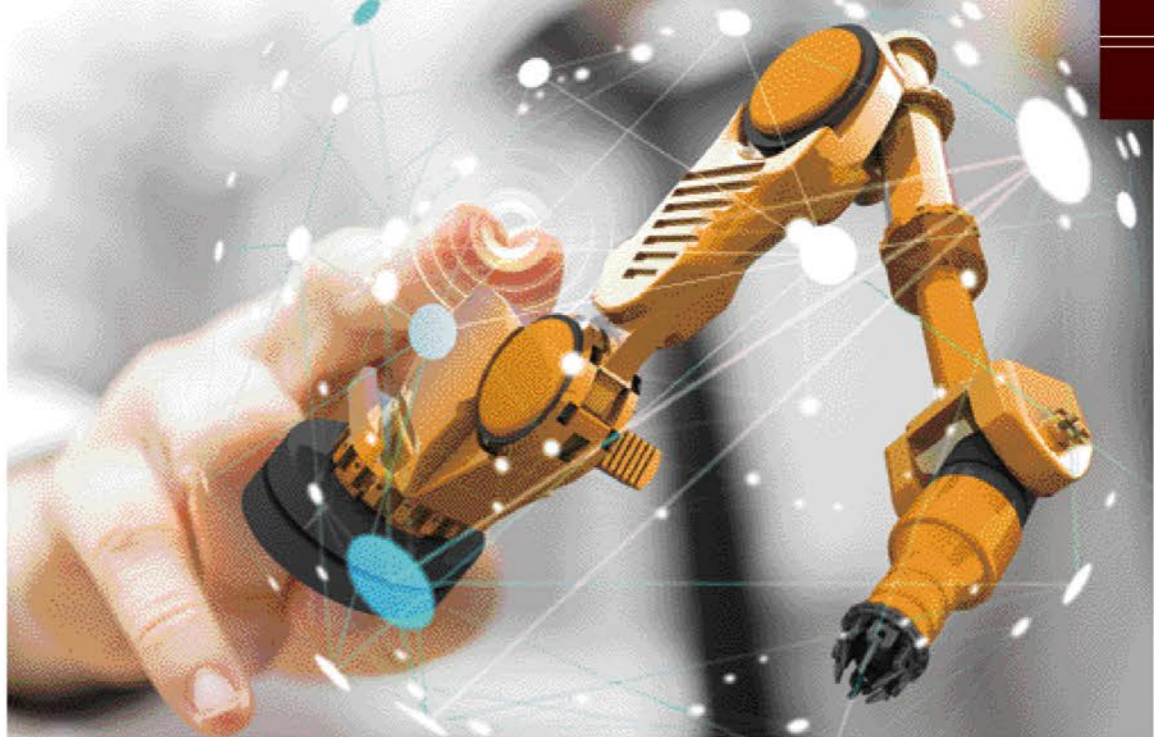


ロボットが人間を超える時代に日本人は生き残れるのだろうか



わが国では、「鉄腕アトム」や「ドラえもん」のお陰もあり、人型ロボットが社会に馴染んでいます。そうしたアニメの影響を受け、産業用ロボットの開発や実用化の分野で活躍する道を選んだ研究者やエンジニアの数では恐らく日本は世界ナンバーワンと言えるでしょう。

実際、自動車や電子部品、最近では医療機器や食品などの製造工場でも、ロボットの普及率はすさまじく、世界から注目を集めています。トヨタ自動車では生産ラインでのロボット活用は当たり前で、最近では在宅介護の分野にもロボットを導入すべく海外のAI（人工知能）企業を買収し、「高齢化ビジネスの切り札」にするとのこと。

実は日本政府は2015年1月に「ロボット新戦略」を正式決定しているのです。既に産業用ロボットの出荷額でも稼働台数でも世界一を達成した日本。その意味では、日本は「ロボット大国」に他なりません。今後は、農林水産業や医療介護などの現場でも、ロボットの活用が拡大するはずで

す。政府の掲げる目標では、「2020年には

国内のロボット市場を2・4兆円にまで拡大する」とのこと。サービス業の分野でもロボットの普及率を30%まで引き上げようとの目標が掲げられています。長崎県のハウステンボスには、「変なホテル」というフロントやポーターまでロボットが務めるホテルが話題となっていますが、ロボットを導入することで、人件費を通常の25%に抑えることに成功しているようです。

今後はサービスや生産のあらゆる場面において、ロボットが人間に代わり、主役の座に躍り出る時代が間違いなく到来するでしょう。その「ロボット時代」の最先端を走っているのが、日本なのです。2020年には、東京オリンピック・パラリンピックが開催されますが、わが国では「ロボット・オリンピック」も計画されています。2018年にはプレ大会が実施され、世界中の最先端ロボットが日本に結集するはず。官民挙げて「ロボット新戦略」を推し進める日本とすれば、何としても成功させたいものです。

日本の強みはいくつもあります。第一は、これまで培ってきたモノづくりのノウハウ。

少子高齢化の影響を世界で最も早く経験している日本においては、労働生産性を高めるためにも匠の技をロボットに学習、体得させることが期待されています。2020年には大企業で25%、中小企業でも10%の仕事はロボットに委ねる計画が打ち出されているほど。

第二は、サービスの向上にロボットを活かす発想です。食品分野では2020年を目標にピッキング、仕分け、検品にかかわるロボットの普及率を30%まで高めることが目標となっています。また、介護ロボットに対する期待は高まる一方で、2020年にはこの分野でのロボットの市場は500億円に拡大することが見込まれているのです。トヨタ自動車が目しているのもうなずけるでしょう。

第三は、インフラ、災害対応、建設、農林水産業の分野です。就業者数が減少し、高齢化の波もあり、深刻な労働力不足に陥っているわが国にとって、特に、こうした分野でのロボット労働力の導入は、待ったなしの課題です。農林水産業・食品産業分野で省力化などに貢献する。新たなロボットを20機種以上導入する計画が進んでいます。民間サイドでの動きも加速する一方です。その旗振り役を果たしているのが、ソフト

バンクが開発した、ヒューマノイドロボットの「ベッパ」でしょう。愛嬌のある感情表現やコミュニケーション能力で人気を博しています。同社の孫正義氏によれば、「今後30年以内にIQ10000を超えるロボットが登場するに違いない」。平均的人間のIQは100。天才と言われる人で200です。そんな人間社会にIQ10000を超えるロボットが登場すれば、社会は前代未聞の大変革を経験することになるはずです。蒸気機関車やインターネットの比ではないでしょう。

孫氏に言わせれば、「人間が開発したツールが人間を超える、という人類未踏の世界が目前に迫っている」というわけです。そうなれば、まさに「シンギュラリティの到来」となり、あらゆる分野でロボットと人間が共存する生き方が求められることになるはず。果たして、日本人が世界に先駆けてロボットと共生するライフスタイルを実現できるようになるのでしょうか。

現在、産業用ロボットの分野では、日本の企業が世界市場でシェア第一位を確保しています。2015年の世界のロボット関連の市場規模は710億ドル。2019年には、その2倍近い1354億ドルにまで拡大するとの予測も。安川電機、ファナック、

川崎重工業、ヤマハ発動機、不二越など日本のメーカーが世界市場を席巻してきましたが、近年、中国のロボットメーカーが日本を猛追中。何しろ、自ら設計した理想のロボットと正式に結婚するエンジニアが現れたのが今の中国です。これからは、ロボットの開発レースにおいて、これまで以上に熾烈な開発競争が展開されることは間違いないと思われれます。

Profile

国際政治経済学者、北京交通大学客員教授、前参議院議員。
東京外国語大学中国科卒。米ジョージ・ワシントン大学政治学博士。
総務大臣政務官、外務大臣政務官など歴任。専門は「技術と社会の未来予測」「国家と個人の安全保障」「長寿企業の戦略経営」。
ベストセラー「ヘッジファンド」(文春新書)、「快人エジソン」(日本経済新聞社)、「武器としての超現代史」(学研プラス)など著書多数。

